

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和2年度学校評価 結果

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	唐津市立厳木中学校
1 前年度 評価結果の概要	全職員一丸となって学校教育目標の実現に向けて取り組むことができた。校内研究の充実が功を奏し、かなり改善が図られ、学校評価アンケート（保護者・生徒・教員）からも好意的な評価をいただいている。今年度は、生徒指導の3機能（自己存在感・共感的な人間関係・自己決定）をふまえて、さらに教育活動のPDCAを推進し、向上を図りたい。
2 学校教育目標	地域に根つき、笑顔と感動があふれる厳木中学校～主体的、協働的に取り組む生徒の育成～
3 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体的に学ぶ魅力ある授業を展開し、学習意欲を高める。 ・生徒に活躍の場を持たせ承認する場面を増やし、自己肯定感を高める。 ・「立腰教育」を柱として生活規律を確立し、自己指導力と規範意識を高める。

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1)共通評価項目				最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組		具体的取組	達成度（評価）	実施結果	評価	意見や提言
	取組内容	成果指標（数値目標）					
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践 ・基礎・基本的な学習内容の定着を目指した取組	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師70%以上 ○「Qフレンズ」提出率が90%以上	・各教科による単元テストの実施。 ・生徒会学芸部による家庭学習の充実を目指した取組（Qフレンズ、Qタイム、Qテストの実施）。	B	・家庭学習時間については、全体的に増えてきたが、Qフレンズの提出率は「Qフレンズを毎日提出している」と答えた生徒が、5月86%、12月54%、2月62%であった。Qフレンズの取組ませ方について、教師が共通理解を行い、また、学芸部により生徒の意識を高める働きかけをしていく必要がある。	B	・学校独自の家庭学習ノート「Qフレンズ」も含め、丁寧な指導がされている。県内統一テストの結果にも表れている。
	○校内研修の充実	○12月調査の「活用」に関する問題の正答率が前年度より向上する全校生徒の割合が70%以上。	・活用力を育成するための授業を、各教科年間指導計画に必ず入れ、研究授業を全職員年2回行うことで、授業改善を図る。	B	・活用力を育成するための授業に全職員で取り組むことができた。 ・12月調査では、1年生は思考・判断・表現に関する正答率は全ての教科において県の正答率を下回った。2年生は思考・判断・表現に関する正答率は全ての教科において上回った。しかし、1年生時の結果との経年比較では、全ての教科で向上している結果は得られず、数値目標の達成にはいってなかった。	B	・よく研修されている。数値目標の達成度で評価するのであれば、生徒の実態と数値目標の妥当性はどうなのかと気になる。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳に関するアンケートにおける肯定的な回答をした生徒80%以上	・道徳に関するアンケートの実施 ・道徳科の授業力向上のための研究授業の実施 ・保護者と連携したふれあい道徳の実施	A	・2月に実施した道徳に関するアンケートでは、肯定的な回答をした生徒は、1年96%、2年生89%、3年生96%、全校93%であった。 ・各学年、23の内容項目をすべて取り扱い、ある程度、個々の生徒の道徳性を高めることができた。今後、それが、実際の生活の中で生かされるように、さらに指導を継続していきたい。	A	・廊下等の掲示物や道徳の授業ワークシートの掲示がよい。生徒の意見がよく書き込まれており、それに対する先生の印入れなど生徒との関係性も見えてくる。
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	●職員に相談しやすいと感じる生徒率95%以上。	・毎月、「いじめ・生活アンケート」を実施 ・6月と11月に担任との教育相談週間を実施	B	・悩み事があるとき、職員に相談しやすいと答えた生徒82%。 ・1月に職員研修を行い、いじめなどに関する知識を再確認して、生徒とのかかわり方が少し変化してきた。	B	いじめの予防や早期発見・早期対応など尽力されている。数値目標が高すぎるのではないかと。
●健康・体づくり	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●朝食喫食率100% ●「健康に食事は大切である」と考える生徒100%	・保健だより、給食だよりやアンケートを通して朝食を食べることの意義の理解と啓発を行う。 ・栄養教諭と連携し、実践的な指導や調理実習等を行う。	B	・生活習慣アンケートを6月と10月に実施。10月(1週間)の朝食をとって登校する生徒90%～97%。 ・「健康に食事は大切である」と答えた生徒(2年) 97%。 ・11月を食育月間として、全学年調理実習を行い、魚の捌き方や地元の食材を使った料理を通して、食に関する知識を学ぶことが出来ていた。	A	・給食の残菜もほとんどないことから食に対する意識の高さがうかがえる。そもそも100%という成果指標が高すぎるのではないかと。全校生徒数が少ないので1人の占める割合も高くなる。
	○健康意識の向上と体力づくり	○自分の体が健康だと考える生徒が70%以上	・スポーツテストの実施 ・授業前の補強運動を実施 ・外部講師を活用した講話の実施	A	・12月に実施したアンケート調査で体力の向上を感じている生徒は77%。睡眠不足だと感じている生徒は61%。十分な食事をとれているは92%であった。総合的に向上してきている。	A	・少数ではあるが自家用車での送り迎えは、生徒の体力不足につながるのではないかと心配している。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・定時退勤日の設定 ・学校閉庁日の設定 ・部活動休業日の設定	A	・全職員の時間外勤務時間の平均27時間(12月までの平均よりも1時間減) ・学校閉庁日を3日間設定したり、部活動休業日の週2日以上の設定がほぼ100%であったりと、教職員が休暇を取得しやすい環境を整備した。	A	・学校としてのいろんな取組はよいので、効率的な働き方をしているということだろう。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組		具体的取組	達成度（評価）	実施結果	評価	意見や提言
	取組内容	成果指標（数値目標）					
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○特別支援に関する専門性が向上した教員80パーセント以上	・特別支援に関する研修会 ・個別の支援計画の記入についての研修会 ・特別支援学級在籍生徒の進路保障についての研修会	B	・特別支援個別の支援計画の作成や、特別支援学級在籍生徒の情報交換を丁寧に行うことができた。進路については、全職員に向けての様々な情報提供を行うことが十分とは言えなかった。	B	・小中連携の中で、小学校の該当児童とその指導法について情報共有することも先生たちの指導力を高めることにつながるのではないかと。
○進路指導の充実	◎生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした生徒(中学校3年生)80%以上	・総合的な学習を中心に、全ての教科やふるさと探訪や職場体験、地元企業訪問等の郷土学習を通して郷土を愛し将来の目標に向かって自ら考える時間を確保する。	A	・この1年間で3回アンケートを実施したが、第3回(2月実施)が一番高い数値をだした。3年生が78%、全校で75%と、進路や将来に対する意識は高まってきた。目標の80%には届かなかったが、良い結果を出すことができた。	A	・生徒発達段階に応じた指導が行われていることがうかがえるアンケート結果である。3年生全員が希望進路を実現したことが、3年間の進路指導の適切さを物語っている。
○生徒会活動の活性化	○生徒に活躍の場を持たせ承認する場面を増やし、自己肯定感を高める。	○自己肯定感が向上した生徒70%以上	・生徒集会、生徒総会、新入生対面式等の行事で活躍する場をたくさん設ける。	B	・生徒集会、生徒総会などの学校行事等において、本部や専門部長を中心に活動する場面を多くもつことにより、自己肯定感を図るアンケート項目2つで77%と67%の生徒が肯定的に答えた。	A	・生徒が1つになって行う行事は団結力を高める。アンケート項目2つの平均値は数値目標を超えている。
○地域連携	○いきいき学ぶからつっ子育成事業による教育活動	○生徒満足度について肯定的な回答(「楽しかった」「役に立つ」)をした生徒80%以上	・1年魚のさばき方教室の実施 ・2年煮魚教室の実施 ・3年食育に係る料理教室の実施 ・全学年朝の読み語り	A	・中間評価アンケート(12月)と最終評価アンケート(2月)調査の平均で肯定的に回答した生徒が1年生95% 2年生83% 3年生98% 全校91%	A	・コロナ禍の中、地域の人材を活用して目的に応じた効果的な活動がされていた。他の分野でも地域には優れた人がいるので、必要に応じて尋ねるとよい。

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は新型コロナウイルス感染症の渦中にあり、知恵と工夫を試された1年間であった。 ・足元を固めたことによって、地域との連携もさらに深まり、教育活動のPDCAという教職員の意識も高まった。 ・取組内容や具体的取組は効果を上げているので次年度も継続し、学校関係者の意見を受けて成果指標(数値目標)の設定については再考する必要がある。
----------------	--